

京都大学地理学談話会

# 会 報

第20号



2009

## [目次]

### 寄稿

旧教養部人文地理学教室の先生方, そのプロフィール……………	山田 誠 (1968年卒)	1
私の「履歴書」—溺れる者は藁をにまみれて…—……………	坂本 勉 (1981年卒)	3
教室の思い出と地理学への期待……………	森木 隆浩 (1987年卒)	7
仕事と私……………	谷口美都子 (1991年卒)	9

### 秋季地理学談話会の報告 …………… 10

〈OB交流会〉 講師：谷口美都子 (1991年卒)、中藤容子 (1992年卒)

〈講演会〉

地方小都市のスマートシュリンキング 小森 星児 (1959年卒)

### 研究室便り

〈小林致広客員教授の着任について〉……………	12
〈総合博物館における地図資料等の利用について〉……………	13
〈地理学教室への寄贈図書～2008年度～〉……………	13
〈研究室の動静〉……………	18
〈3回生の自己紹介〉	
〈2008年度の実習旅行〉	
〈学部卒業生・院生の進路〉	
〈院生の研究状況の報告〉	
〈2009年度講義題目〉	

### 事務局から

〈地理学談話会2008年度会計報告〉……………	20
〈訃報〉……………	21
〈住所不明者についてお願い〉……………	21
〈オープンキャンパス：2008年度の報告と2009年度のお知らせ〉……………	22
〈2009年度地理学談話会のお知らせ〉……………	22
〈『談話会報』の製本と文学部図書館への寄贈について〉……………	23
〈地理学教室所蔵の写真資料について〉……………	23
〈京都大学総合博物館での特別展のご案内〉……………	23

※表紙写真： 2009年4月15日開催の新3回生歓迎会～百万遍北の居酒屋で乾杯～

## 寄稿

### 旧教養部人文地理学教室の先生方、 そのプロフィール

龍谷大学

山田 誠(1968年卒)

昨年『京都大学文学部地理学教室百年史』(市販版は『地理学 京都の百年』、いずれもナカニシヤ出版刊)が刊行された際、私は「藤岡謙二郎と教養部」という項目の執筆を依頼され、そこで藤岡先生の人となり、とりわけ文学部地理学教室とのかかわりの面を中心として略述した。私にこの項目の執筆依頼があったのは、おそらくは、私が教養部人文地理学教室で専任の教官(助教授以上)として勤務した経験を有する者として唯一の在世者であったためであろう。ただ、その原稿ではタイトルが指定されていたために、藤岡先生以外の旧教養部人文地理学教室関係の先生方については、お名前を記す程度しか言及することができなかった。そこで本稿では、旧教養部人文地理学教室で教鞭をとられた藤岡先生以外の4人の先生方について、私自身の思い出を含めて紹介したい。

西村睦男先生は1938年の文学部地理学教室のご卒業、卒業論文は台北の都市地理学に関するものであった。『地理論叢』にそれに基づくと思われる論文が掲載されている。台湾や山口県、さらには京都

市内の中等学校の教員を経て、1951年に教養部(当時は「分校」と称した)に助教授として赴任された。経済地理学をご専門とされ、文学部で担当された特殊講義(当時の呼称は「研究」)や演習でも、経済地理学を取り上げられることが多かった。その一方で、矢守一彦先生や山澄元先生などの近世歴史地理学の専門家の協力を得て、萩藩領に関する共同研究を主宰されたり、中心地とその勢力圏というクリスタラー以来の都市地理学の重要問題に独自の解釈を加えた論著を著されたりするなどのお仕事をも成し遂げられた。1963年に教授に昇進され、藤岡先生ともども人文地理学教室を支えておられたが、奈良女子大学に大学院が設置されることとなった1968年に、その担当教授として同大学に転出された。その後も何度か京大文学部・文学研究科に非常勤講師として出講されたことがある。奈良女子大学では文学部長を経験され、また奈良女子大定年後に勤務された奈良大学では学長を務められるなど、大学管理面でも大きな足跡を残された。先生は、教会でのオルガン演奏などに力を注がれる晩年をすごしておられたが、2006年3月に奥様と相前後して逝去された。そのとき私はたまたま院生と海外巡検に出かけており、ご葬儀に参列できなかったことが悔やまれる。

西村先生が転出された後をうけて助教授として教養部に着任されたのは浮田典良先生である。1952年の文学部地理学教室のご卒業、その後教養部の助手、大阪

府立大学の講師，助教授を経ての着任であった。先生のご専門の領域は農業，農村の歴史地理で，もともとは日本の近世のそれらを研究しておられたが，1960年代前半に2年間の西ドイツ留学を経験されたのを契機としてヨーロッパへもフィールドを広げられ，また後にはテーマについても，ツーリズムの地理学，教育の地理学など当時は日本ではあまり取り上げられることの多くなかった分野を開拓された。晩年には地図表現法についても2冊の書物を著しておられる。浮田先生は1971年に教授に昇任され，後に教養部長も務められたが，1988年に定年まで4年を余して京大を辞され，関西学院大学文学部に移られた。同大学退任後は神戸学院大学でも教授を務められ，最晩年には砺波市立散村問題研究所の所長もを務められた。先生が京大に着任されたのは私が大学院に入学したときで，その後4年間，講義や演習でご指導いただいた。また先生が転出された後に私が京大に勤めることになったという事情もあり，先生には最後までいろいろとご配慮いただくことが多かった。2004年の晩秋に，当時私が会長を務めていたニュー FHG（野外歴史地理学研究会）の創立（もしくは再発足）15周年の記念パーティが開かれた際，先生は病を押して出席してくださった。亡くなられるわずか1ヵ月前のことであった。

足利健亮先生は1959年に文学部地理学教室を卒業され，同大学院で研鑽を積まれた後，1962年に教養部助手に就任され

た。その後，追手門学院大学文学部講師，大阪府立大学教養部講師，助教授を経て，1974年に助教授として教養部に着任された。これは，その前年に教養部全体に対して認められた若干の教官定員増のうちの1ポストが人文地理学教室に割り当てられたことに伴う新任人事であった。先生はその後，1986年に教授に昇任され，1992年の教養部改組の際に大学院人間・環境学研究科に所属された。また，その翌年から4年間，同研究科の第2代の研究科長を務められた。先生のご専門は日本の歴史地理学で，とりわけ都市や交通路に関するテーマを多く取り上げられた。主として対象とされた時代は古代であったが，中世・近世についてもいくつもの成果を公表された。先生は研究科長任期の終わりごろにNHK教育テレビの市民大学講座に出演され，多くのファンを得られるなど，歴史地理学の普及にも大きく貢献された。しかし，そのころから先生のお体を病魔がむしばみ始め，定年退官を9ヶ月後に控えた1999年8月に帰らぬ人となられた。新しい組織が多くの難題を抱える中での4年間の研究科長在任が先生の寿命を縮めたであろうことは疑いなく，周囲にいた者の一人として責任の一端を感じている。

青木伸好先生は文学部地理学教室1965年のご卒業，同大学院を経て，1968年に教養部助手となられ，3年間務められた。その後，関西大学文学部の講師・助教授を経て，1978年に教養部助教授に就任された。藤岡先生の定年ご退官に伴う人事

であった。先生は1990年に教授に昇任されると同時に、当時部内に置かれていた「教養部改善案準備委員会」の副委員長ポストにつかれ、翌年には委員長として教養部の総合人間学部と大学院人間・環境学研究科への改組に向けて中心的な役割を果たされた。先生は、その改組の過程で当初（1991年）から上記の研究科を担当され、翌年からはそこを本務先とされた。先生のご専門はフランス現代地理学の最先端の理論をベースとした都市・農村関係の研究であり、大阪とその周辺をフィールドとした実証研究に加えて、後には人間・環境学研究科への留学生の指導を兼ねて、中国の都市近郊調査も計画された。しかし、その調査の実現直前に病に倒れ、1994年9月に56歳の若さで逝去された。青木先生の場合も、足利先生と同様、教養部改革の犠牲者であったとの想いを捨てきれない。

今春、21年間勤務した京大を定年退職した私は、在職中にこれら4人の先生をお送りしたことになる。天寿を全うされた西村先生や、なされるべきお仕事を成事に成し遂げられて世を去られた浮田先生はともかくとして、足利・青木両先生の死はあまりにも早すぎた。こうした痛恨の想いが、私自身に旧教養部人文地理学教室の語り部というような役割を演じさせる契機となっている。本稿も、そうした想いに端を発するもののご理解いただければ幸いである。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 私の履歴書

—溺れるものは藁にまみれて…—

坂一農園／河合塾

坂本 勉(1981年卒)

世渡りの手練手管を開陳するつもりはないが、人生はサボれば苦しく、がんばれば楽なのだろうと思う。デーヴィスの河食輪廻のモデルに、幼年期、壮年期、老年期があり、青年期がないのは、モデルというものに中途半端なものは不要だからだ。青年期は子どもでも大人でもない中途半端な時期で、後には戻れないし先行きは不透明、そういう時期にサボれば本当に苦しく、苦しさはのちのちまで響く。以下、偉くなったわけでもないのに「私の履歴書」を書く。特に書きたいテーマはない。いよいよ焼きがまわったのだろうか、お迎えが近いのだろうか思っけて勘弁してほしい。

在学中、本当によくサボった。それでいて向学心だけは旺盛なものだから始末に負えない。大学院聴講生まで入ると14年間も大学に在籍した。地理学教室に入ったのは、小方登さん、青山宏夫さん、小長谷（当時は水本）有紀さん、藤田裕嗣さんらと同じで、水津一朗先生が教授、應地利明先生が助教授、石川義孝先生が助手だった年だ。一つ上の学年には田中和子さん、藤井正さん、松尾容孝さんがいた。大学院入学は水内俊雄さんと同じ年で、博士課程進学時に教授が應地先生

に、助教授が金田章裕先生に代わり、助手はずっと吉田敏弘先生。そして、ときどき同学年になったり前後の学年になったりした方々に、内田忠賢さん、小田匡保さん、小島泰雄さん、酒井高正さん、月原敏博さん、松田隆典さん、山崎孝史さん、山近博義さんらがいる。

サボっただけではない。不義理、不義理の連続。そもそも1回生のとき、藤岡謙二郎先生に「スライド係をします」と約束したのに、連絡もせずにサボって登山に行ってしまう、当時教養部の助手だった金田先生にはたいへんな迷惑をかけた。大学院聴講生のときには、人文地理学会への投稿原稿を金田先生に見ていただいていたのに、連絡もお礼もせずにとんづらし、編集委員の先生方には審査までしていただいたのに投稿もしなかった。サボりまくりの私に対して、松尾さんが心配してときどき手紙をくれた。このありがたい手紙に対して、私は「お節介はいい加減にしてくれ！」のような叫びを返信した。こうなると、教室の方々には誰にも顔向けできない。もはや人間失格。ある友人は私のために、「溺れる者は藁をにまみれて死んでまえ！」という諺まで作ってくれた。以後約20年、大学構内にすら怖くて立ち入ることができない。住居も奈良県に移して謹慎塾居。

こんな私でもでかい顔をして生きていけるのは、年齢のなせる業。30歳代半ばのある日、なぜかしらないが、突然、気持ち楽になり、以来、憂いはまったくなく、毎日お気楽。「ああ、あの日をもつ

て私の長い青春は終わったな。」と思う。今年の2月にはとうとう卒論発表会を聴きに行くという破廉恥な挙動に出た。

大学院在学中、アルバイトの予備校講師に精を出した。大学聴講生から修士課程在学中は小規模な予備校で英語を担当し、夏と冬は應地先生の紹介で広島へ出かけて地理を担当した。博士課程進学時に、就職の決まった水内さんに代わって河合塾で地理を担当することになり、とんづら後は、應地先生にご紹介いただいた短大講師のほか、出町柳にある自然食八百屋の曳き売りや、曳き売り中に知り合いになった幼稚園に頼まれて園児と遊ぶアルバイトなどをやったこともあるが、基本的にはずっと河合塾の講師をしている。現在は郷里の長野県に帰っており、表の正業は農業（花卉生産）ということにしてあるが、週5～6日は妻子を捨てて旅に出て裏の邪業に精を出している。東京のネグラは、予備校で知り合った若者の自宅ビル（九段下SSTビル）に借りている部屋で、神田神保町のはずれの俎橋近傍にある。

卒論発表会に行ったのは、発表者の中に予備校で知り合いになった若者の阪口知洋さんがいたからだ。同様の若者は村田陽平さんなど何人かいるが近づけなかった。面の皮が厚くなって教室に近づいたら、談話会報にエッセイを書けという命令だ。断る資格がないから仕方ない。いままでずっと隠れていた人間が表舞台に踊り出て、とんだお目汚しの雑文を載せるのだから、たいへん申し訳なく思う。

卒論発表会を聴いた感想は、はっきり言って「なんじゃこれ」でした。私が卒論・修論発表をしたときも、先輩たちはきっと同じような感想を持ったのだろうが、「こんな論文なら今の時代、ネットを駆使すれば1週間でできるじゃん！」というものが多かった。用事があったので卒論しか聴かなかったが、修論も聴けば、口直しができたかもしれない。失敗した。しかし、考えてみれば、今は、インターネットのおかげで通り一遍のデータなら、国内であろうが外国であろうが入手できる時代だ。Google mapを見れば世界各地のなんの変哲もない場所の風景写真まで up されている。卒論作成が楽といえば楽だが、私のような素人の目が肥えてきているから、通り一遍のデータを得て加工しただけなら「なんじゃこれ」と思われるだけで、苦勞といえば苦勞、たいへんな時代だ。

発表会の中で、「その論文のどこが地理なのか？」という質問が出て、くすっと笑った。私が在学していたときにも同じようなことがよく話題になったからだ。そういえば、在学中、談話会の後の飲み会で私が何かしゃべったら、小林茂先生が「今の学生もそんなことを考えとんのか。僕が大学生だった時分とちっとも変わらんな。」とおっしゃったことがあった。また、應地先生が「地理にたずさわっている人が扱うテーマならそれは地理だ。」「卒論では地理学のテーマか否かは問わない。論文としての適否を問う。」とおっしゃっていたことも思い出す。永

遠のテーマというものがあるのかもしれないが、「何が地理で何が地理でないのか」というのも時代を超えてしばしば出てくる話題だ。

「何が地理で何が地理でないのか」は、予備校での模試問題検討会でもときに話題になる。高校で学習する内容は雑学的なところがあるうえ、そもそも模試なのだから、大学入試で出題される内容、あるいは出題されそうな内容なら、問題として成立する。地理であろうがなかろうが、それはどうでもいいことなのだ。にもかかわらず、議論が白熱する。私は受験地理のプロではあるが地理学については素人を決め込んでいるのでこのテーマに関しては無責任で、「これは地理の問題とはいえない」と言う同僚を「地理じゃない病」患者と診断し、「これも地理のテーマだ」と言う同僚を「なんでも地理病」患者だとちゃかしているが、地理でゼニを稼ぐ者のひとりだから、議論が白熱するときは当然、「何でも地理病」患者の味方をする。そのほうが活躍の場が広がり、ゼニを稼ぐチャンスも多くなる。いや、もっと大上段に言うなら、「ここまでが地理だ」などと困ってしまえば堅苦しいし、地理学が固定化して発展性がなくなり、伝統芸能のようになってしまうのではないかと思うからだ。

話はどんどんずれていくが、最近の日本はどんどん清潔で型苦しくなっているような気がする。そして、素人が幅をかきしているいろいろなことに型をはめている。大学入試問題という点でも、「出題ミスが

どうのこうの」「高校の履修範囲を逸脱」  
「これは良問であれば悪問だ」とか外野の意見がうるさくなっているから、素人の事務方が出題の先生方にさまざまな圧迫を加えているのではないかと懸念する。入試問題というのは、大学が好き勝手に出しているのだ。私ども外野が当然さまざまな意見を言うけれど、そんなものは適当に聞き流してほしい。専門家はもっといばっているのだ、と個人的には思っている。ずるいことを言うと、いちやもんをつける隙のない入試問題ばかりになると、私ども予備校講師の活躍の場が減る。たとえば「K大学はこんな変な問題を出す、俺に任せろ、対策はこうだ。」と言えなくなる。

予備校でも素人が強くなっている。事務方が強くなり、学校というより企業になってきている。そして、地理についていえば、河合塾に限らず、地理学科出身者が少なくなっている。もちろん、地理出身でなくても優れた講師はいっぱいいる。地理出身者が少なくなっている理由は、就職先が多様化していることなどいろいろあろうが、地理出身者には予備校講師としてすら使い物にならない人が多いということもあつたら問題だ。地理学教室に限らず社会への貢献というとき、使い物になる人材を社会に出すということが大事だと思うからだ。私も授業は上手とはいえ、使い物になっているかどうかは疑問であるが、まあそれなりにがんばっている。

高校地理の内容は雑学的だから地理出

身でなければダメだというわけでもないが、最近、地理学科を出ていない講師と接していて「何かが、基本的な何かが違う」と思う。違いは何かといえば、それは「こだわり」だ。主題図ひとつ作るときの細部へのこだわり、何かを言うときに論拠として挙げるデータへのこだわり、若者を見るとき、マスではなく個として見ようとするこだわり。地理出身者には総じてそういうこだわりがある。私は在学中サボりまくっていたが、在籍期間が異様に長かったせいもあって、耳学問で身に付いたことも多いし、地理の匂いや癖が身体に染み込んでいるのかもしれない。つまらないといえばつまないし、仕事の生産性も上がらないのだが、変なこだわりが私にもあり、この「こだわり」こそが、青春が終わり憂いを失い毎日が楽しいお気楽生活の原動力になっている。

以上、思いついたことをとりとめもなく書いた。裏社会の人間だから何を書いても恥ずかしくないということもある。知り合いになった若者たちの中には、何かの拍子で地理学科に行く人もいて、今年是小田匡保さんのところに行った若者がいる。「よろしく言ってくれ」と頼んだらちゃんと伝えてくれたようだ。教室出身の多くのみなさまとは、今後もそんなかたちでのお付き合いしかできないと思う。今回、この雑文を表舞台に出したこと、どうか許していただきたい。再び裏に潜みます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆



## 教室の思い出と地理学への期待

京都府庁

森木 隆浩(1987年卒)

今年の2月、久々に地理学談話会(卒論発表会)に参加させていただいた。卒業後、京都府庁に勤務していることもあって、数年に一度は参加させていただいているが、毎年の卒論テーマを眺めるだけでバラエティに富んでいて、時代を映す鏡のようで大変興味深い。内容は玉石混淆といった感もあるが、それは昔から同じこと。切り方によってはおもしろい研究ができそうに思う。伝統的に懇切丁寧な指導というのはなくテーマも自由であるが、その分自己責任でやらないと何も進まない。だが、そのおかげで、自分で課題を考えると最も大切な基本を身につけることが出来たと感謝している。その点は、社会に出てから大変助かった。公務員の特徴かもしれないが、言われたことはきちんとこなすが自分で考えられない人間が結構多いのである。

私の卒論テーマは、大阪市内の中高層住宅の立地動向であったが、手書きの地図にメッシュを切って、1ますずつ地域類型ごとにインスタントレタリングのシールを貼っていったことが懐かしい。今ではパソコンで計算から地図作成まで簡単にできるのであろうが、その分個人の考えをより求められるので、逆に今の学生はかわいそうな気がする。

この談話会の日に、私たちが3回生の時の1984年(昭和59年)の教室旅行の冊子を見つけた。私は昭和62年3月の卒業であるが、1年多く学生生活を送ったので、61年の卒業生と同じ学年

である。私たちの同期は6名と少なく、また大学院進学者もいなかった。進路は、企業が2名、教員が2名、公務員が2名であったと記憶している。同期のうち大阪府立高校で教鞭を執っている出口さんとは、同じ地理同好会のメンバーということで卒業後20年以上経った今でも毎年正月に定例的に顔を合わせている。

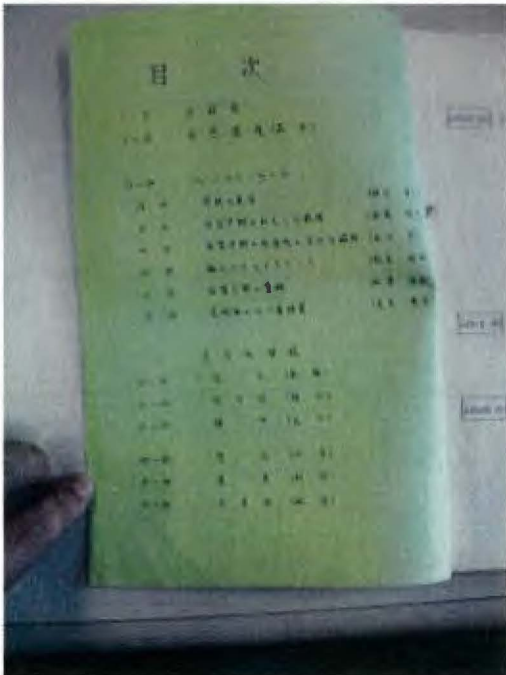
59年の教室旅行は、佐賀から有田、佐世保、諫早、雲仙、島原というコースを辿ったもので、私はのり養殖業の現状を調査するために漁協でヒアリングを行った。右も左も変わらず冷や汗をかきながら訪問したことを覚えているが、どのような場所だったかと現在の地図を見てみると、なんとすぐ近くに佐賀空港が出来ていてびっくりした。諫早湾干拓の問題も雲仙普賢岳の噴火も当時は想像することもできなかった。25年も経つと自然の力や人間の力で地域は大きく変わるものである。

さて、卒業後、京都府庁に運良く就職することができ、既に20年以上が経過した。一番最初は用地買収に携わっていたが、その後、交通政策や総合計画の策定、情報政策など企画関係を中心に15年ほど勤めて、この4月からは、安心・安全まちづくり推進課という、今までと全く違った職場で働いている。

この20年以上の間に、自治体や公務員を取り巻く状況は大変厳しくなっている。三位一体改革で地方交付税が削減されたことに加え、百年に一度という大不況で税収は大幅に落ち込み破綻寸前の自治体も多い。公務員の不祥事がマスコミで大きく取り上げられ、「休まず、遅れず、働かず」というのが公務員の代名詞のように言われることもあるが、ほとんどの公務員は頑張っている。



本格的な地方分権の時代を迎え、これからは、いかに地域の自立を確立していくかが課題である。京都府でも、地域住民自らが自分の住む地域のことを考え、主体的に地域づくりに取り組めるよう、「地域力の再生」を府政の最重点に掲げている。このような中で、自治体の職員の役割は変わらざるを得ない。単に法律を解釈し、通達を右から左に流すのではなく、自ら地域に入って、住民、市町村、NPO、企業、研究者などの間に立って、地域課題の解決に向けてコーディネートをしていく、そのような仲介者の役割が求められている。そのような問題意識を持って、昨年、京都府内の府・市町村職員有志、大学研究者を中心として、地域政策について自ら考える「自治創出プラットフォーム京都もやいなおしの会」というNPOを立ち上げた。(http://blog.kyo-moyai.net/, メールアドレス: info@kyo-moyai.net) ご興味のある方は一度アクセスいただくと幸いです。



近年、政策科学、公共政策を掲げる大学・大学院が増え、公共人材の育成や地域との連携事例が増えている。政治、法律、経済などの分野が中心で、残念ながら地理学はどれも影が薄いように思う。しかし、地域から見ると、総合的に地域を研究してきた地理学が、研究成果の還元や人材育成の面でもっと地域に貢献していただけないかと思っているがどうだろうか。自治の現場での地理学のこれからの活躍に期待したい。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 仕事と私

同志社女子中学・高等学校  
谷口美都子(1991年卒)

私は 1995 年 4 月より、同志社女子中学校・高等学校で社会科教師として働いています。小学校からずっと国公立育ちだった私にとって、同志社女子は私の学校に対するイメージを大きく変える学校でした。レンガ造りの校舎，キリスト教主義に基づく毎日の礼拝やさまざまな宗教行事，創立者新島襄に対する思い。また，フレンドリーな教員と生徒の関係，制服のない自由な服装，そして女子ばかりの生徒…。私が育ってきた学校にはなかったものばかりでした。

社会科教員として，これまでに主に中学・高校の「地理」を担当してきました。その他，中学の歴史や，生徒が興味を持ったテーマを調べて発表するという演習形式の授業も何度か担当しました。女子はどちらかというと，「地理」より「歴史」好きが多いですが，海外旅行した時の写真やグッズを見せたり，ビデオ教材を使ったりして，生徒が興味を持つきっかけをつくりました。また，世界の料理や身近な外国製品を各自で調べてきたものを導入にしたり，世界の同年代の子どもたちの様子を紹介したりしてきました。多くの生徒が苦手意識をもっている地形や気候の分野では，シンプルでわかりやすい説明を心がけるよう，授業に取り組ん

できました。

地理の学習を通して，生徒たちには，異なる文化や価値観を知ってもらいたい，そしてそこから，自国の文化や価値観を見つめなおし，自分自身についても考えてもらいたいと思っています。そのためには，まず私自身の世界を広げて，説得性をもたせることが大事だなと感じています。幸い，同志社大学への推薦進学が基本の学校ですので，わりあい自由に授業をさせてもらえることは有難いなと思っています。自分の趣味や好きなことが仕事につながっていることも多く，そういう点では幸せを感じています。

ただ最近では，私学をとりまく環境も厳しく，本校でも外部受験をめざす理系コースをつくり，この春，はじめての卒業生を送り出しました。私も昨年からは高 3 の地理のセンター試験対策の授業を担当しています。これまでの授業ではあまりとりあげなかった分野についても，新鮮な気持ちで取り組んでいます。

教科指導以外の仕事—ホームルーム担任，クラブ活動の顧問，学校行事の引率，さまざまな校務分掌—については，就職するまであまり考えていませんでしたが，これらの仕事を通じて学校運営や学校経営について学びました。現在は，総務部で国際交流の担当をしています。海外での語学研修や学校交流プログラムの企画の立案，現地の学校や旅行会社との交渉，生徒や保護者への説明，初めて海外に行く生徒たちの引率などが主な仕事です。具体的には，アメリカ・サンフランシスコ

コ郊外の学校との派遣・受け入れプログラム、高校生対象のイギリス・ケンブリッジでの語学研修、昨夏から始めた中学生対象のオーストラリア・アデレードでの語学研修などを行っています。外部の人との折衝など、気疲れすることも多いのですが、新しいもの好きの私の性格に結構あっているかなと思います。

これから社会に出て行かれる方には、「楽しんで仕事をしてください」とエールを送りたいです。就職してすぐに自分が思っていた仕事、やりたい仕事ができるとはかぎりません。「なんでこんなことをしないとイケないのか」と思うこともあるかもしれません。でも、その中で楽しみややりがいを見つけて、工夫してください。また、新しい人や信頼できる仲間との出会い、書物との出会いなど、新しいものとの出会いを大切にしてください。そして、その出会いを通して視野を広げ、成長していくことができる人であってください。

これは自分自身への言葉でもあります。昔の私は、そんなにポジティブな方ではなかったのですが、社会人として働く中で、成長期の生徒からもパワーをもらい、以前より前向き志向に、度胸もついてきたかなと思っています。もちろん、日々の仕事やいろんな人間関係に疲れてしまうこともありますが、私の仕事の原点、社会科教師として「地理学」と関わり続けることができることの喜びを思い出し、「初心を忘れず、笑顔を忘れず、感謝を忘れず」を心がけたいと思っています。

→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 秋季地理学談話会の報告

2008年11月15日、文学部新館第1・2講義室において、秋季地理学談話会を開催し、大勢の卒業生や在学生の皆様にご参加いただきました。ご講演いただいた小森星児氏（1959年卒）はじめ、OB交流会で講師をしてくださった卒業生の方々に厚く御礼申し上げます。談話会に先立って、教室見学会も企画されました。

以下、OB交流会と講演会についてご報告いたします。

### <OB交流会>

卒業生の谷口美都子氏（同志社女子中学・高等学校、1991年卒）と中藤容子氏（琵琶湖博物館、1992年卒）のお二人に講師としておいでいただき、在学当時の思い出や社会に出るまでの体験、社会に出てからの歩みを在学生たちにお話いただき、さまざまなアドバイスだけでなく暖かい励ましもいただきました。若い世代の活発な意見交換があり、楽しい交流の機会となりました。講師の方々と司会者（柴田陽一氏（D3）と岡本憲幸氏（聴講生））との間で打ち合わせして、進行内容も企画していただきました。ありがとうございました。

<講演会>

地方小都市のスマート・シュリンク

小森 星児

(ひょうごボランティアプラザ)

(1959年卒)

最初に丹波篠山について関心を抱いたのは、3回生の演習で藤岡謙二郎先生が「5万石以上の城下町でありながらまだ市制を敷いていない例」として挙げられたことに遡る。先生は都市形成における歴史的要素の重要性を強調されたかったので、篠山や同じ兵庫県の出石などはむしろ不都合な例外ではなかったのではないかと推察されるが、東京生まれでデカンショ節を通じてしか篠山のことを知らなかった私には、物語の登場人物が実在することを知ったような驚きを覚えた。

それから半世紀を経て、さしたる覚悟もなしに篠山に移住した理由の一つは、先生の宿題に答えてみたい誘惑があったのかもしれない。私自身、長く日本とヨーロッパの大都市をフィールドに選んで論文を書き、そのなかで都心、インナーシティ、ウオーターフロント、計画的郊外住宅地などを取り上げたが、地方都市についてはほとんどなにも知らない。ヨーロッパの魅力に富む地方都市のことを知れば知るほど、日本の地方都市について勉強してみたいと思うようになった。

さらに、高校時代、愛読した杉浦民平、岩田豊雄（獅子文六）、山田吉彦（きだみ

のる）など西欧的教養を身につけた知識人が、戦中戦後、農村での体験を鋭い観察と諧謔で解剖した著作の影響もなかったといえない。ちなみに、きだみの『気違い部落周遊紀行』の舞台は八王子郊外の山村で、位置関係からいうと篠山に似ていなくもない。きだみが忘れられ、宮本常一が高く評価されているのはいささか不公平ではなからうか。

さて、篠山市は、大阪との距離からいうと加古川、草津、名張、橋本、和歌山などとほぼ同じであるが、停滞的・閉鎖的な要素が濃厚な特異な存在である。たとえば人口の推移をみると、大正9年の第1回国勢調査以来、戦後一時的に膨張した時期を除けば4万人台で動かなかった。隣接の三田市が、最近まで人口増加率日本一の座を保ってきたのと比べるとその差は明らかである。

篠山市を含む丹波地域の停滞の大きな原因が、交通網整備の遅れにあったことはいうまでもない。舞鶴若狭道の開通（1988）、JR福知山線の複線電化（1997）などによってこの状況は大きく変わったが、大阪都市圏からの開発圧力は三田のニュータウンや工業団地に吸収され、篠山盆地に届くに至らなかった。また、大阪都市圏では唯一、私鉄資本が進出していない三田・篠山軸では、民間による大規模住宅地の開発や大型ショッピングセンターの進出がなく、三田の関西学院大学総合政策学部を例外に大学にも敬遠されていた。

さらに地元自治体の非力も指摘されなければならぬ。10年前に4町が合併した篠山市は平成の大合併の先駆としてもはやされたが、実際には昭和の大合併の最後の例であった。たとえば反対派に対する取引材料として合併債を利用して4町にそれぞれ巨大なハコモノを建設したが、それがいまでは夕張に次ぐといわれる財政悪化の原因になっている。昭和の大合併の場合、高度成長に伴う適度のインフレ、さらに人口の増加と税収の自然増で債務の負担は軽減されたが、今回は外部環境がすべて逆風になってきた。

もともと、篠山市の行政区画は篠山盆地＝多紀郡であり、ほぼ旧篠山藩の藩域と同じである。こうした地理的歴史的一体性にもかかわらず、旧篠山町の政治的リーダーシップ欠如のため市制施行が遅れたのが大きな禍根を残した。

ところで、こうした地方小都市をめぐる新しい動きとしてスマート・シュリンクという考えが注目されている。これまでのわが国の都市開発戦略の特色を省みると、大都市都心部の再開発やニュータウン整備にはそれなりの成果を挙げたが、大都市・地方圏を問わず市街地の拡散や低密度化の抑制には無力であった。その背景には、拡大開発志向の都市形成理念と中央集権的な都市計画決定の仕組みがある。しかし、本格的な人口減少と高齢化時代を迎え、規模減少のもとでの戦略的地域経営が求められている。

篠山市の場合、すでに民間バス路線の

撤退、耕作放棄農地の増加、大規模小売店舗の郊外進出にともなう中心市街地の空洞化などの現象が顕在化しているが、今後は限界集落の増加に伴う小学校の統廃合、コミュニティ機能の弱体化と集落営農の崩壊、外部資本の撤退などをはじめ多くの課題が噴出するものと懸念される。

こうした縮減とリストラが求められる変化に対し、全員参加と一人一票を基本原理とする組織、たとえば自治会、農協、商工会、社協などは対応が難しく、こうしたメンバーからなる市の総合計画策定、実行、改善の流れも有効性に大きな疑問が生じるであろう。

こうしてみると、ここ暫くは、地方小都市は舵を失ったまま衰退の方向に漂流することは避けられないと思われる。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 研究室便り

### <小林致広 客員教授が

#### 着任されました>

2009年4月より、小林致広先生（1972年卒）が文学部・文学研究科の客員教授として着任されました。

小林先生（現在、神戸市外国語大学教授）は、メソアメリカのエスノヒストリーならびに中南米先住民族運動の研究に精力的に取り組んでおられます。地理学を含めてフィールドワーク系の諸分野（地域研究、文化人類学、社会学など）だけ

でなく、歴史学や言語学等など広い分野の学生たちの関心に応じていただけるものと期待しております。

小林先生には、特殊講義の他、学部演習ⅠとⅡ、大学院演習をご担当いただきます。

## ＜総合博物館における 地図資料等の利用について＞

地理部門の助教は2008年度より不在が続いておりますが、当面の代替措置として、地理資料担当の教務補佐員に地図・地理資料の管理にあたっていただいております。(勤務日：月・火、木・金。勤務時間：9:00 - 17:00 (除く、昼休み))

総合博物館に収蔵されている地図資料等の閲覧・撮影などを希望される方は、お手数ですが、下記の窓口までご連絡のうえ、所定の手続きをお取りくださいますようお願いいたします。

### 京都大学総合博物館 事務室

電話：075-753-3272

## ＜地理学教室への寄贈図書 ～2007年度～＞

個々の寄贈者のお名前は掲載しておりませんが、昨年度、地理学教室にご寄贈いただいた図書の一覧です(雑誌・定期刊行物等は除く)。これらの図書は、文学研究科図書館または地理学共同研究室に配置し、学生ならびに教室スタッフの研

究・教育に活用させていただいております。厚く御礼申し上げます。

過去にいただいた図書も含めて、これらの寄贈図書は、皆様にもご利用いただけるようにしておりますので、どうぞご活用ください。

- ・『2007年度地理学野外実習報告』(中部大学人文学部 歴史地理学科)
- ・『関西大学地理学研究室実習報告書』(32)2007年度
- ・千田稔編『アジアの時代の地理学 伝統と変革』古今書院
- ・関西大学文学部地理学・地理環境学教室『地下鉄今里筋線を歩く—もうひとつの大阪を知る地理散歩—』
- ・『雨季と断食のカンチャンプル 現代バングラデシュ農村調査報告』(名古屋大学 海外派遣報告書)
- ・『海外調査報告書&「社会環境学のタベ」報告集』
- ・『第8回全国散居村サミット in となみ 砺波散村地域研究所第50回例会記念シンポジウムの記録—テーマ—21世紀砺波平野のくらしと水環境』
- ・総合地球環境学研究所『琵琶湖—淀川水系における流域管理モデルの構築：琵琶湖—淀川プロジェクト最終成果報告書』(2007)
- ・外部評価報告書 1996.4-2007.3 (京都大学東南アジア研究所)
- ・九州大学文学部地理学研究室『臼杵市』地域調査報告10(2007)
- ・『現代南アジアの地域システム3』広島大学(2007)
- ・石井英也『景観形成の歴史地理学—関東縁辺の地域特性—』二宮書店
- ・『お茶の水女子大学文教育学部地理学コース輪島巡検報告書』CD-ROM
- ・楠瀬慶太『新・蕨生榎山風土記—高知県香美市域120

- 人から聞いた村の歴史・生活・民俗―』地域資料叢書 9 (九州大学)
- ・『鹿沼市史 地理編』
  - ・『秋野沢の歴史』
  - ・堀健彦編『平安越後古図集成』新潟大学大域プロジェクト研究資料叢刊 XII(2008)
  - ・岩鼻通明『韓国・伝統文化のたび』ナカニシヤ出版
  - ・荒井良雄・岡本耕平・田原裕子・柴彦威編『中国都市の生活空間：社会構造・ジェンダー・高齢者』ナカニシヤ出版
  - ・京都大学文学部地理学教室編『地理学 京都の百年』ナカニシヤ出版
  - ・京都大学文学部地理学教室編『京都大学文学部地理学教室百年史』ナカニシヤ出版
  - ・京都大学文学部地理学教室編『京都大学文学部地理学教室百年史／地理学京都の百年 補遺』ナカニシヤ出版
  - ・渡辺理絵『近世武家地の住民と屋敷管理』大阪大学出版会
  - ・『法務図書館所蔵 陸地測量部発行地図目録』(2008) 法務図書館
  - ・服部勇『チャート・珪質堆積物―その堆積作用と続成過程―』近未来社
  - ・静岡地理教育研究会編『よみがえれ大井川―その変貌と住民―』古今書院
  - ・『郷土地理史談』
  - ・近畿都市学会編『21世紀の都市像―地域を活かすまちづくり―』古今書院
  - ・中西遼太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験―絵地図と古写真の世界』ナカニシヤ出版
  - ・新世紀菜の花会『上海十話―あのこ(瀝)は今、そして～』
  - ・伊藤喜栄・藤塚吉浩『図説 21世紀日本の地域問題』古今書院
  - ・金田章裕『大地へのまなざし 歴史地理学の散歩道』思文閣出版
  - ・人文地理学会『地理学からみた都市交通と都市環境』第8回公開セミナー 資料集
  - ・阿部和俊・王徳編『都市の景観地理 中国編』古今書院
  - ・内田和子『ため池―その多面的機能と活用―』農林統計協会
  - ・赤堀雅幸編『異文化理解講座7 民衆のイスラーム スーフィー聖者・精霊の世界』山川出版
  - ・小池康弘編『異文化理解講座8 現代中米・カリブを読む 政治・経済・国際関係』山川出版
  - ・鈴木正崇編『異文化理解講座9 神話と芸能のインド 神々を演じる人々』山川出版
  - ・川端基夫『立地ウォーズ 企業・地域の成長戦略と「場所のチカラ」』新評論
  - ・竹内淳彦『日本経済地理読本』東洋経済新報社
  - ・石原潤・馬平・秋山元秀・高橋健太郎編『寧夏回族自治区の経済と文化』奈良大学文学部地理学科
  - ・黒田達朗・田淵隆俊・中村良平『都市と地域の経済学』有斐閣ブックス
  - ・『国会等の移転』オンライン講演集 第3, 5集(平成16, 20年)
  - ・中藤康俊『日本の農業の近代化と経営』古今書院
  - ・エマニュエル・トット・石崎晴己・東松秀雄訳『移民の運命 同化か隔離か』藤原書店
  - ・笹生衛『神仏と村景観の考古学：地域環境の変化と信仰の視点から』弘文堂
  - ・国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告 環境利用システムの多様性と生活世界』第123集(2005)
  - ・国際カリキュラム研究会編『外国人労働者の子女の教育に関する調査研究 ―ブラジル人の教育機会の現状と課題―』国際カリキュラム研究会(2006)



- ・名古屋大学環境学研究科『2004年北部スマトラ地震調査報告Ⅱ』(2006)
- ・労働政策研究・研修機構『都市雇用と都市機能に係る戦略課題の研究』労働政策研究報告書 No.89(2007)
- ・太郎丸博『人文・社会科学のためのカテゴリーカル・データ解析入門』ナカニシヤ出版(2005)
- ・植村善博『台風 23 号災害と水害環境：2004 年京都府丹後地方の事例』海青社(2005)
- ・金本良嗣, 蓮池勝人, 藤原徹『政策評価マイクロモデル』東洋経済新報社(2006)
- ・梶田孝道, 宮島喬編『国際化する日本社会』東京大学出版会(2002)
- ・宮島喬, 加納弘勝編『変容する日本社会と文化』東京大学出版会(2002)
- ・梶田孝道, 小倉充夫編『国民国家はどう変わるか』東京大学出版会(2002)
- ・宮島喬, 梶田孝道編『マイノリティと社会構造』東京大学出版会(2002)
- ・小倉充夫, 梶田孝道編『グローバル化と社会変動』東京大学出版会(2002)
- ・小倉充夫, 加納弘勝編『東アジアと日本社会』東京大学出版会(2002)
- ・加納弘勝, 小倉充夫編『変貌する「第三世界」と国際社会』東京大学出版会(2002)
- ・青柳真智子編『国勢調査の文化人類学：人種・民族分類の比較研究』古今書院(2004)
- ・加藤恵正『都市・地域経済の転換に係る経済地理学研究：集積経済の再編と再生の方向』神戸商科大学経済研究所(2002)
- ・寺西俊一・細田衛士編『環境保全への政策統合』岩波書店(2003)
- ・太田和博, 加藤一誠, 小島克巳『交通の産業連関分析』日本評論社(2006)
- ・高橋美由紀『在郷町の歴史人口学：近世における地域と地方都市の発展』ミネルヴァ書房(2005)
- ・山田浩之, 徳岡一幸編『地域経済学入門 新版』有斐閣(2007)
- ・佐々木公明, 文世一『都市経済学の基礎』有斐閣(2000)
- ・佐々木公明, 張陽『都市サブセンター形成の経済分析』有斐閣(2005)
- ・加藤一誠『アメリカにおける道路整備と地域開発：アパラチアの事例から』古今書院(2002)
- ・村上英樹 [ほか] 編著『航空の経済学』ミネルヴァ書房(2006)
- ・文世一『交通混雑の理論と政策：時間・都市空間・ネットワーク』東洋経済新報社(2005)
- ・京都大学東南アジア研究所『要覧 2008 年度 人々とともにある地域像を求めて』
- ・『立正大学文部科学省学術研究高度化推進事業オープンリサーチセンター(ORC)整備事業 平成 19 年度事業報告書』
- ・山村亜希『中世都市の空間構造』吉川弘文館
- ・南條善治, 吉永一彦『日本の世代生命表：1891-2000 年期間生命表に基づく』日本大学人口研究所(2002)
- ・厚生省大臣官房統計情報部編『人口動態保健所・市区町村別統計：人口動態統計特殊報告』
- ・野中健一『昆虫食先進国ニッポン』亜紀書房(2008)
- ・木下良『事典 日本古代の道と駅』吉川弘文館
- ・阿部和俊編『都市の景観地理 大陸ヨーロッパ編』古今書院(2009)
- ・首都大学東京大学院都市環境科学研究科『地理学教室年報 2007 年度』
- ・小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会
- ・金沢大学文学部地理学教室編『自然・社会・ひとへ地理学を学ぶ〜』古今書院
- ・NOZAWA Hideki: Histoire de la penée géographique en

- France et au Japon.
- Boom, Bust & Echo: How to Profit from the Coming Demographic Shift, D.K.Foot with D.Stoffman/
  - Interregional Inequalities in ISRAEL 1948-1995 Population and Housing Census Data, Israel Central Bureau of Statistics
  - Urban Trends In England: Latest Evidence from the 1991 Census
  - Larry S. Bourne and David F. Ley, eds. : The changing social geography of Canadian cities, McGill-Queen's University Press.
  - Noel A.C. Cressie. Rev. ed.: Statistics for spatial data, John Wiley & Sons.
  - Andrew Mason, Mitoshi Yamaguchi, eds. : Population change, labor markets, and sustainable growth: towards a new economic paradigm, Elsevier, 2007.
  - Alan Agresti: Categorical data analysis, 2nd ed., Wiley, 2002.
  - The Population: the national atlas of Sweden.
  - Okahashi, H. : Emerging New Industrial Spaces and Regional Developments in India, Manohar
  - NUEVO ATLAS NACIONAL DE MEXICO /Universidad Nacional Autonoma de Mexico Instituto de Geografia, 2007
  - 2007 JAPANESE PROGRESS IN CLIMATOLOGY, 法政大学気候学談話会
  - The Oxford-Kobe Environment Seminar: THE ENVIRONMENTAL HISTORIES OF EUROPE AND JAPAN 12-14 September 2007 The Kobe Institute, Kobe Japan
  - 平成 17 年度～ 19 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)）研究成果報告書『黒潮ルートのイモ栽培文化—琉球弧の島々と台湾—』研究代表者：橋本征治（関西大学）
  - 平成 17 年度～ 18 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)）研究成果報告書『明治前期地籍編製事業の起源・展開・地域的差異』研究代表者：島津俊之（和歌山大学）
  - 平成 16 ～ 17 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (1) 研究成果報告書『成熟時代における都市圏構造の再編とリバブル・シティの空間構造に関する地理学的研究』研究代表者：山下博樹（鳥取大学）
  - 平成 16 ～ 17 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書『アジアの大都市における人口高齢化に伴う都市経済構造の変容』研究代表者：高山正樹（大阪外国語大学）
  - 平成 9 ～ 11 年度科学研究費補助金基盤研究基盤研究 (B) (2) 研究成果報告書『国際労働力移動における地域ネットワークの形成と政策課題に関する国際比較研究』研究代表者：森正（法政大学）
  - 平成 17 ～ 20 年度科学研究費補助金基盤研究 (A) 研究成果報告書『地理情報科学の教授法の確立—大学にいかにか効果的に GIS を教えるか—』研究代表者：村山祐司（筑波大学）
  - 平成 18 ～ 20 年度日本学術振興会科研研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書『現代日本における国際結婚増加の要因とインパクトに関する地理学的研究』研究代表者：石川義孝（京都大学）
  - 待兼山論叢 日本学篇 41-42 (2007-2008)（大阪大学）
  - 総合資料館だより（京都府立総合資料館）
  - 大阪大学総合学術博物館叢書 3 城下町大阪—絵図
  - 地図からみた武士の姿—
  - 京漁連だより 第 406- 412 号
  - しま no.213-216, 第 53 巻, 第 1-4 号（財団法人日本離島センター）
  - 奈良大地理 第 14 号 (2008)（奈良大学）
  - いま山形から No.71-72 (2008)

- ・応用地域学研究 第10-12号(2005-2007)
- ・地理情報システム学会講演論文集 Vol.6(1997), Vol.16(2007)
- ・空間・社会・地理思想 第11号(2007)
- ・人文学部紀要 第28-29号(神戸学院大学)
- ・地理学研究報告 第19号(2008)(千葉大学)
- ・地理研究 15号(2008)法政大学大学院
- ・地理誌叢 第49巻第1-2号, 第50巻第1号(2008)(日本大学)
- ・エネルギー史研究 no.23(2008)(九州大学)
- ・石炭研究資料叢書 no.29(九州大学)
- ・地理 5-12月号 vol.53(2008), 1-3月号(2009)
- ・東北学院大学論集 歴史と文化 第43号
- ・地域研究 vol.48, no.2, vol.49, no.1(2008)(立正地理学会)
- ・お茶の水地理 第47-48号(2007-2008)
- ・地理学評論 5, 7, 9, 10月, vol.81(2008), 1, 3月, vol.82(2009)
- ・人間科学 第21-22号(琉球大学)
- ・地域学研究 第21号(駒澤大学)
- ・地理学研究 第36号(2008)(駒澤大学)
- ・地學雜誌 2008 vol.117, no.2-6(2008), vol.118, no.1(2009)
- ・砺波散村地域研究所研究紀要 第25号(2008)
- ・外邦図研究ニューズレター No.5(2008)
- ・宇大地理 第11号 H20.3(宇都宮大学)
- ・地図情報 vol.28, no.1-4
- ・地域研究年報 30(2008)(筑波大学)
- ・人文地理学研究 28(2008)(筑波大学)
- ・愛知大学総合郷土研究所紀要 第53輯(2008)
- ・地質調査報告 vol.58, no.9/10, 11/12(2007), vol.59, no.1/2, no.3/4, no.5/6(2008)
- ・茨城地理 第8-9号(2007-2009)
- ・駒澤地理 第44号(2008)
- ・京都大学東南アジア研究所ニュース NEWSLETTER No.5
- ・地理学報告 第106-107号(2008-2009)(愛知教育大学)
- ・観光科学研究 創刊号(2008)(首都大学東京)
- ・えりあぐんま 第14号 2008 群馬地理学会
- ・no.60(CD)能登半島東方表層堆積図(2007)
- ・no.61(CD)能登半島西方海底地質図(2007)
- ・no.62(CD)枝幸沖海底地質図(2007)
- ・no.63(CD)日御碕沖表層堆積図(2007)
- ・no.64(CD)日向灘海底地質図(2008)
- ・no.65(CD)遠州灘海底地質図(2008)
- ・no.66(CD)石狩湾表層堆積図(2008)
- ・no.67(CD)石狩湾海底地質図(2008)
- ・測量 第72-73号(日本測量協会関西支部)
- ・測量 vol.57 No.12(日本測量協会関西支部)
- ・人間文化 H&S 23-24(2008) 神戸学院大学
- ・山形大学紀要(社会科学) 第39巻第1号
- ・研究論叢 2008 LXXI-LXXII(2008)(京都外国語大学)
- ・早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊第16号 -1,2
- ・早稲田大学大学院教育学研究科紀要 no.19(2008)
- ・沖縄地理第7号(2006), 8号(2008)(沖縄地理学会)
- ・地域と社会 第11号(2008)(大阪商業大学)
- ・都市情報学研究 no.12-13(2007-2008) 名城大学
- ・地理学論集 No.83(2008)(北海道地理学会)
- ・日本海地域の自然と環境 第15号(福井大学)
- ・文化史學 第64号(同志社大学・文化史学会)
- ・臨地研究報告 第2号-沼津市と周辺地域の地域調査-(2008)(東京学芸大学)
- ・立命館地理学 20(2008)
- ・和歌山地理 第28号(2008)
- ・東北文化研究所紀要 第40号, 別冊: 境澤文書目録

(2008)

- ・ JILPT 資料シリーズ No.44(2008)－都市・雇用データによる都市機能指標と圏域設定の基礎整備－
- ・ エリア山口 第 38 号(2009)
- ・ 歴史人類 第 37 号 (筑波大学)
- ・ 関西学院史学 第 36 号
- ・ オーストラリア研究紀要 第 34 号 (追手門学院大学)
- ・ 法政地理 第 41 号(2009)
- ・ 京都大学地域研究統合情報センター年報 2008 (平成 19 年度)
- ・ ASIAN AND AFRICAN AREA STUDIES, no.07-2 (2007), no.08-1(2008)
- ・ Southeast Asian Studies 東南アジア研究 vol.45,no.3-4, vol.46, no.1-2.
- ・ AFRICAN STUDY MONOGRAPHS, no.37-39( 2008), vol.29 no.2-3(2008), vol.30 no.1 (2009)
- ・ Tsukuba geoenvironmental sciences vol.3 ( 2007)
- ・ GEOGRAPHICAL REPORTS OF TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY, No.43( 2008)
- ・ MEDITERRANEAN WORLD XVIII 地 中海論集 2006
- ・ COSMICA AREA STUDIES, XXXVIII( 2008) (京都外国語大学)
- ・ GEOGRAPHICAL REVIEW OF JAPAN ENGLISH EDITION, no.1 (2008)

## <研究室の動静>

教室の事務は、引き続き三上純子さんをお願い致しております。

本年度は、大学院博士後期課程 2 名、修士課程 2 名、学部 4 回生 9 名、3 回生 8 名、研究生 1 名が在学中です。

## <3 回生の自己紹介>

本年度は 8 名の 3 回生を迎えました。皆さんに簡単に自己紹介していただきます。

(3 回生)

石江 悠治

初めまして、今年度から地理学を専攻することになった石江悠治と申します。実は諸事情で長らく大学に通っていませんでしたので、専門の単位が全く取れていないという絶望的な状況です。何とかしなければと思っています。

岩橋 涼

大阪府出身の岩橋です。以前から環境問題に興味があり、大学に入ってから農業、農村についても関心を持つようになりました。部活動は交響楽団に所属しており、日々練習に励んでいます。これから地理学専修で充実した生活を送りたいと思いますので、よろしくお願いします。

外賀 雄太

外賀雄太です。人文地理学だけでなく地形など自然地理学の分野にも興味があります。(ラクロス部に入っています。) よろしくをお願いします。

高橋 俊裕

昨年まで仏文に所属していましたが、今年度から地理学研究室で学ぶことになりました。前のものが全く身につかなかったのですが、こちらでは情けないことに

ならないようにがんばりたいと思います。  
よろしくをお願いします。

田村 麗佳

初めまして。3回生の田村麗佳です。私は神奈川県横浜市の出身で、趣味はサッカー観戦です。地理学を専攻しようと考え始めたのが、2回生の専修決めの頃からと遅い方ですが、進学した今はやる気に満ち溢れているので、これからたくさん勉強していきたいです。

中川 あゆみ

富山県出身の中川あゆみです。小さなころから動物が大好きで、アフリカの自然、とくにサバンナに興味があります。高校では地理をとっていなくて、地理学に関しては全くの素人ですが、いろいろ学びたいです。よろしくをお願いします。

林 良彦

香川県出身の林良彦と申します。高校時に地理に興味を持ち、専修として選びました。色々な所をフラフラとするのが好きです。まだ具体的に何をしたいのか決まっていないので、これから考えていきます。どうぞよろしくおねがいします。

藤村 友太

はじめまして、藤村友太と言います。出身は大阪で、府立北野高校卒です。昔からぼんやり地図を眺めたり、知らないところに行ったりするのが好きでした。都市地理学などを学びたいという気持ちも

ありますが、当面は広くさまざまな分野に触れていけたらいいなと思っています。また、小学校以来ずっと野球をしており、今も体育会の硬式野球部に所属しています。よろしくおねがいします。

#### <2008年度の実習旅行>

2008年度は、10月20～23日まで、静岡県三島市において、2回生・3回生の計6名が調査を行い、報告書を作成しました。

#### <学部卒業生・院生の進路>

\*学部卒業生

山下 益也 (株)竹田鉄工所  
安達 裕美子 明治安田生命保険相互会社

飯島 崇善

上田 直人 東芝メディカルシステムズ(株)

阪口 知洋 文学研究科(修士課程)

里村 知美 住友電気工業(株)

\*聴講生

岡本 憲幸 東海中学・高等学校

\*修士課程

牛島 由紀子

煙山 哲史 浅野学園

南都 奈緒子 京都大学総合博物館

廣本 幸子 堺市役所

#### <院生の研究状況の報告>

今年度までの院生の研究状況をお知らせします。以下は、閲読を経た論文のリストです。

D3 沖 慶子

・牧口常三郎著『人生地理学』の同時代評, 地理科学 58-2, 65-91 頁(2003)

<2009年度講義題目>

\*講義(系共通科目)\*

米家泰作・田中和子 人文地理学概説

\*特殊講義\*

客員教授 小林致広 空間の植民地化と  
地図・地誌の作成

教授 石川義孝 エスニック集団の人口地理学

教授 田中和子 距離と空間と行動に関する地理学の諸問題

准教授 米家泰作 地理的知の歴史地理学

人環教授 金坂清則 旅と旅行記・旅行家に関する学際的研究と地理学

人環准教授 小方 登 衛星画像・地理情報分析の原理と応用

理学部准教授 堤 浩之 地形学

経研准教授 森 知也 新しい経済地理学の基礎

講師 白幡洋三郎 文化史と地理

講師 秋山道雄 環境と開発の地理学

講師 戸祭由美夫 歴史地理学における古地図利用

講師 村山祐司 都市と交通の地理学

講師 高木彰彦 政治地理学研究

講師 岡橋秀典 現代農村の地域学

\*演習Ⅰ—地理学研究法—\*

小林致広・石川義孝・田中和子・米家泰作

\*演習Ⅱ—4回生演習—\*

小林致広・石川義孝・田中和子・米家泰作

\*講読\*

教授 石川義孝 英語地理書講読

教授 田中和子 ドイツ地理書講読

人文研助教 田中祐理子 フランス地理書講読

人文研助教 小野寺 史郎 中国地理書講読

\*地理学実習\*

田中和子・米家泰作

\*大学院演習—地域の諸問題—\*

小林致広・石川義孝・田中和子・米家泰作

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

事務局から

<地理学談話会2008年度会計報告>

(2008年4月1日~2009年3月31日)

【資金会計】	(備考)
<収入>	
年会費	197,000
寄附金*	250,000
利子	76
前年度繰越金	243,599
-----	
計	690,675

\*下村数馬氏ご遺族よりの寄付を含む

<支出>

運営への振替	106,793
郵便振替手数料	15,060
次年度への繰越	568,822

-----  
計 690,675

【運営会計】

<収入>

資金会計からの振替	106,793
秋期懇親会会費	69,000
春期予餞会会費	93,000

-----  
計 268,793

<支出>

秋期懇親会	69,000
OB 交流会経費	9,438
春期論文発表会・予餞会経費会	93,000
会報・名簿等印刷費	5,000
通信・文具等費	92,355
弔電・供花等	0

-----  
計 268,793

<訃報>

前回の会報以降、次の方々がお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(確認分、括弧内は卒業年、敬称略)

中田 栄一 (1941年卒)

下村 数馬 (1938年卒)

<住所不明者についてお願い>

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は、談話会事務局までご一報ください。(数字は卒業年、敬称略)

安福 伸光 (1997年卒)

李 禧淑 (2001年博)

池内 麟太郎 (1973年卒)

石角 強 (1970年卒)

石原 大嗣 (1997年卒)

石村 裕輔 (1992年卒)

今井 平八 (1944年卒)

岩部 敏夫 (1991年卒)

遠藤 元 (1996年卒)

遠藤 正雄 (1978年卒)

大野 宏 (1992年卒)

大山 晃司 (1995年卒)

岡本 靖一 (1967年卒)

岡本 美津子 (1987年卒)

興津 俊之 (1991年卒)

小口 稔 (1991年卒)

小野寺 伴彦 (2000年卒)

楓 雅之(泰昌) (1945年卒)

勝村(赤座)眞知子 (1973年卒)

川合 大地 (1998年卒)

川添 和明 (1995年卒)

貴志 謙介 (1981年卒)

木地 節郎 (1949年卒)

北口 卓美 (1990年卒)

久保 智祥 (2003年卒)

合屋 有希 (1994年卒)

児玉 高太朗 (1990年卒)

坂部 誠治 (1991年卒)

嶋野 浩一朗 (1997年卒)

清水 究吾 (1998年卒)

新谷 泰久	(1990年卒)
神力 弘幸	(1993年卒)
鈴木 伸国	(1988年卒)
田島 渡	(1948年卒)
塚本 誠	(1990年卒)
都子 屋	(1940年卒)
中山 耕至	(1993年卒)
那須 久代	(1988年卒)
檜崎(藤川) こず恵	(1998年卒)
南部 一寿	(1999年卒)
西尾 正隆	(1970年卒)
西沢 仁晴	(1974年卒)
西山 隆彦	(1995年卒)
能勢(朝倉) 正寛	(1962年卒)
林 克子	(1989年卒)
平井 素子	(1996年卒)
福田 新一	(1971年卒)
松本 弘史	(1983年卒)
御手洗 央治	(1993年卒)
山口 一郎	(1980年卒)
山口 滋	(2005年卒)
山下 良	(1989年卒)
山田(児玉) 憲子	(1970年卒)
山中 一高	(1991年卒)
吉野 修司	(1995年卒)
六嶋 美也子	(1993年卒)
渡邊 克己	(2004年卒)

・説明会もこの一環として、7日に行われました。文学部の全体説明のあと、各系に分かれて専修ごとの説明を行ったうえで、希望先に分かれて、研究室を訪問してもらいました。

2009年度の京都大学主催の全学オープンキャンパスについては、  
<http://www.kyoto-u.ac.jp/>  
 をご覧下さい。文学部の見学・説明会は、8月6(木)の予定です。

地理学教室では、学部だけでなく大学院の受験志望者や、中学高校の教員の方々、また、一般の市民の方にも来て頂けるような企画を検討しております。今年度は、10月31日(土)に開催を予定しています。詳細な日程や参加申込の案内は、地理学教室のホームページ、  
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/>  
 に、掲載する予定ですので、そちらをご覧下さい。

### <2009年度秋期地理学談話

#### のお知らせ>

本年は、下記のようなプログラムを予定しております。どうぞお気軽にお越しくださいますよう、お願いいたします。

記

日時：10月31日(土)

午後1時—5時

### <オープンキャンパス：2008年度の報告と2009年度のお知らせ>

2008年8月に京都大学のオープンキャンパスが開催されました。文学部の見学



場 所：文学部新館 1階

第1・2講義室

◎教室見学会：午後1時より

◎OB交流会：午後2時より

講師（交渉中）

◎講演会：午後3時半より

佐々木 高明 氏（1955年修）

◎懇親会：同日午後5時より

（文学部新館 第1講義室）

## ＜『談話会報』の製本と

### 文学部図書館への寄贈について＞

1990年に『談話会報』復刊第1号が発行されて以来、本号で20号となりました。この機会に、下記のように2冊にまとめて製本し、文学部図書館に寄贈し、永く保管していただくとともに、閲覧希望者に対する利用の便を図りたいと存じます。

復刊前の『談話会報』につきましては、『地理学教室百年史／補遺』作成作業をきっかけに、博物館や教室の保管庫を改めて、整理しましたところ、第1号(1934)ならびに、昭和33年(1958)発行のものが発見されました。談話会会員の皆様で、第2号ならびに第7号以降の『談話会報』についてご存じのことがおありでしたら、ぜひ、お知らせくださいますよう、お願い申し上げます。

『談話会報』(第1, 3-6号(1934-1938)  
および昭和33年版(1958))

『談話会報』(復刊第1-20号  
(1990-2009))

## ＜地理学教室所蔵の

### 写真資料について＞

地理学教室百周年事業に関わる資料整理の際、地理学共同研究室や総合博物館地理作業室のロッカーの中から、地理学教室関係者の古い写真が数百枚、出て参りました。

すべて、デジタルデータとして保存した上で、アルバムに仮整理しております。撮影時期はもちろん、写っておられる方々のお名前もわからないものが多々ございます。卒業生の方々に見ていただいて、写真に関する情報をご提供いただいたり、整理方法をご教示いただければと願っております。

どうぞ、お気軽に教室をお訪ねいただき、アルバムをご覧くださいますよう、お願い申し上げます。

## ＜京都大学総合博物館での特別展

### のご案内＞

下記のような地図展が開催されます。坤輿万国全図、琉球進貢船図屏風、日本海山潮陸図などが展示される予定です。この機会に、大勢の皆様にご覧いただければ幸いに存じます。

「広がる地図文化

—京都大学地図コレクション—  
Map Cultures in Japan: Map collections  
of Kyoto University」

期 間：8月19日（水）～9月6日（日）

※月・火は休館日

場 所：京都大学総合博物館

開 館：9:30 - 16:30

入場料：一般 400 円，  
高校・大学生 300 円，  
小・中学生 200 円

☆一年あたり千円を目処として、それぞれの会員の方々に、談話会の運営経費へのご協力をお願いしております。随時、ご支援をお願いいたします。納入の際は、同封しております「郵便振替用紙」をご利用下さい。

京都大学文学部地理学談話会 会報 第20号

発行日 2009年5月15日

発行者 地理学談話会

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 地理学教室内

TEL: 075-753-2793 (直通)

発行所 京都大学文学部地理学教室

URL <http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/>